

カント第三批判序文前稿について

中 井 正 一

従來傳へらるゝ第三批判序文に先だつてカントがすでに一つの序文を草し、しかもそれが餘りに長きに過ぎると云ふ單なる理由をもつてそれを棄て、新に書きなほしたことはシギスモンド・ベックによるカントの全集の序文⁽¹⁾、又カントの彼への手紙⁽²⁾にも見ることが出来る。この稿は後にベックによつて抄略されたる内容と、變更されたる表題をもつてハルトクノツホ版以後の凡ての全集に編まれてゐる。⁽³⁾「哲學一般について」の論文として知られてゐるのが即それである。この稿の抄略されざる全き寫稿がカントのベックへの手紙と、ものにロスストツク大學圖書館にあるのが發見された

ことはすでにデイルタイにより一八八九年に紹介され、そしてそれがカント文獻に取つて決して等閑に付せらるべきでないことがあはせて注意されてはゐる。⁽⁴⁾しかし、ついに一九二二年のオットウ・ブユークの編せるカツシラー版の全集に至るまでそれが全稿として録さるゝには至らなかつた。私のこゝに序文前稿と云ふのはこの全集及 Lehmann によつて編まれたる *Philosophische Bibliothek*. B. 39b. 1927. に於いて共に同様に命名されたる *Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft*. を指すのである。⁽⁵⁾

このロスストツク前稿、ベック稿、及第三批判

本序との關係比較、又はこの前稿そのものゝカント文獻に對してもつ意味など未だ學界に於いて何の注意も與へられてゐないにもかゝはらず種々私達の興味を引くものがないでない。

—

カントの哲學が彼の同時代並に後の凡ての時代を通じて多くの思惟者によつて、同じ様に問題とされたる事は即それによらねば彼の體系に入るを得ず、又それをもつてはついにその體系に止ることのできない處の物自體の問題であつた。これに關聯して生じ來るカントによつて成された感覺の受動性に對する特殊の取扱方が獨逸觀念論の潮流の終始に互つて一様に理解に困難を感せしめた様である。私達はこの流れの初期の識標の一つと

してファイヒテを見出し又その後期の他の一つとしてコーヘンを見出すであらう。而も、兩者共に全く異なる、寧ろ最も對立的とも云はるべき解釋法によつてその受動性を取扱へることが私達の深い興味を喚ぶと共に、⁶⁾前者のエピゴーネンの一人であるベツクの補正稿を後者のそれであるカツシラー並にビュルクが撤回修正せることは更に一つの皮肉であるとも見られやう。

クローノーフィシャーによればベツクはかのカントに於ける深い缺陷である物自體の救濟によつて、結論さるべき純粹なる觀念論の大なる否定者であるヤコビ及大なる肯立者であるファイヒテの影に只カントの説明者として存在することが出來、而もやはりその二つの影から脱することも出來なかつた處の二重のエピゴーネンとして叙述されてゐ

る。⁽⁷⁾ 反之、デイルタイによれば彼が獨逸唯心論の先端の群の一人であるとは云へ、かの同時代者の中では比較的フイヒテの影から自由にされて居り寧ろカントの忠實なる友として又亞流として見らるべきであると紹介されて居る。⁽⁸⁾

その何れが正しきかは別とするも彼が思想の背景としてフイヒテによつて完成されし觀念論を可成濃い程度にもつてゐたこと、隨つて思惟作用への直接なる反省、それに關聯してゐる表象の非受動性の許容等のことが彼に於いて問題とされてゐたことは彼のカントへの直接なる手紙又彼が謂ふ根源的表象 Ursprüngliches Vorstellen⁽⁹⁾ の思想によつても見ることができらうであらう。カントは彼に一七九二年七月三日の手紙によつて次の如く警告する。⁽¹⁰⁾ 卽ベックが理解し難しとするカントの直觀

の定義は、彼がそれを主觀の内面に見出す規定されたる表象 Bestimmte Vorstellung⁽¹¹⁾ として取扱ふ限り、解する能はざるであらうことを指摘し、それは寧ろ客觀の規定 Bestimmung であることを知ることを要求してゐる。そしてそこには合成された (Zusammengesetztes) 所與體はあり得ない、寧ろ私達は與へられたる多様の合成 Zusammengesetztes⁽¹²⁾ を己自らに成生しなければならぬことを教へてゐる。カントのかく云へる意味は卽、直觀の受動性が純粹に形式的であることを意味し、思惟過程の反省に於いてあらはるる表象されたる表象、表象されたる直觀の如き、卽反省されたる形式とも云ふべき次元を異にしたる領域への觀察に於ける危険性に對する警告を意味すると思はる。思惟の對象と成りたる直觀は形式によつて規

定されし表象 *Bestimmte Vorstellung* であつて、規定する形式そのもの *Bestimmung* では有得ない。

この混同より私達は形式性を脱却したる表象されたる直観を、表象されたる概念に對立せしめ、しかもその兩者の間の溝渠を云々し易い。形式の認識は體系の把握である、即理性の統一性に向つての暗き體驗であらねばならない。それは *Kopf* のそれではなくして *Herzensache* でなくてはならない。カントの直観について單にその受動性を論ずる場合私達の到る否定も、若しカント自身をも導いたであらうところの理性の法則性への敬畏の下に立つとき私達はジステームの意味が何であるか、そしてその受動性の意味が何であつたかについて更に暗き肯定をすらもつことが出来るであらう。この意味でこの手紙に於けるカントの警告は

深い興味をもつてゐる。しかしクーノーフイツンヤー、及ディルタイによる紹介が正しいとするならば——そしてそれより外に今私はその思想を知る術をもたないのであるが——この手紙の受取者はこの警告を理解することが出来なかつた様である。彼の根源的表象の思想もついに、悟性の能動性への内省的觀察によつて來る概念的操作に止まり判斷の依據する形式性そのものゝ把握にまで到達する能はず、只表象されたる直観と、表象されたる概念の分離されたる溝渠の上に根源的表象と云ふ固き橋梁を架さうと試みたにすぎなかつたと見らるべきであらう。かうした彼の立場がこのカントの序文前稿の抄略に對して無意識ではあつたにしても、或過誤をもたらしたかもしれない點を私達は彼の補正稿に見出すが様である。

ベツクの抄略はカントの全稿の五分の二程に當つてゐる。その重要なものは第一章の初頭半頁（カツシラー版）、第二章全體三頁、第四章の殆んど全體二頁、第六章全體二頁、第七章全體二頁、第八章の脚註二頁、第九章全體五頁、第十一章の最初の稿半頁、第十二章全體の五頁であつて其他はその抄略することによつて生ずる文脈補正のためには或は校正としての變更されたる、多數ではあるけれども餘り重要ではない所の語句である。この抄略の理由はこの序文が後に書かれたる本序と重複せざるために第三批序文としての意味を稀薄ならしめむしろ哲學一般又目的論についての一般的考察としての小論としてその面目を保たしめんとした意圖をもつてせられたのであつた⁽¹¹⁾。従つてこの變更されたるベツクの稿を讀んで得る論文

全體への感じと、カントの前稿との感じは全體として甚だ異つた印象を與へる、殊に悲しむべきことは、すでにビュークも指摘したるが如く、ベツク稿に於いてはその抄略によつて——その企て自身が無理であつた様であるが——論旨の脈絡が或は唐突に或は難解に陥り起伏重疊の感を深からしめる、反之、カントの前稿に於ては理路整然しかもベツク稿に於いて論の重きを爲すものがカント前稿に於いては寧ろ他のより重要なるものによつて更へられ、論旨一轉するの思ひあらしめる。

先づ抄略されたる第一章の辟頭に於いてカントは哲學の體系の分野の二大別を提出して思惟の純粹に形式的なる部分と、對象に向つて爲さるゝ思惟の内容的なる部分とを分ちその後者を更に自然哲學(理論的)と道德哲學(實踐的)の二つの分野を

定めてゐる。この所謂「實踐的」praktisch の概念の分析よりカントに於いてこの論文で初めて具體的に問題となりし Technik の意味が確立されたのである。この Technik の概念は彼が思惟一般の體系的組織に於いてその特定なる位置を占めて始めて問題と成つたのであつて、もしこの體系的説明の準備なくしてベック稿に於ける如く直ちに「實踐的」の概念に接するならば、私達はそれをカントの哲學の體系の一構成要素としての「實踐的」と見るを得ずして、寧ろ「實踐的」の概念の持つ一般的意味の分析と成つて、随つてそれより導かる Technik の概念が理論的 (Theoretisch) と實踐的 (praktisch) との中間概念としての體系的意味を失ふことは凡ての他の抄略されたる箇所と相俟つて重大なる影響をこの前稿全體に與へたと云ふべ

きであらう。ベックはこの前稿の取扱の辟頭に於てすでに自己の前序に對する態度を表明してゐるとも云へやう、即彼はカントの數多き他の幾多の論文に於いて成育し來つた體系的結晶の一構成面としてこの稿を見やうとはしなかつたのではないか、と云ふ疑問を提出せしむる。更に次いでベックはかの Technik の概念の叙述である第一章を受けてその概念と判斷力との關係並に他の悟性及理性への關係を論じたる第二章全體を捨て去つてゐる。この章はこの前稿全體に取つては寧ろ重要と見らるべきであらうと思はれる。何故ならばかの興味多き Technik der Natur の概念がこの章に於いて初めて説き起さるゝのであり、しかもこの考へ方が我々の認識能力の Kritik に屬するのであつて決して doktrinales System der Ercken

intuis でない事の論せられてゐる事は先にヘルツへの手紙又第一批判に於いて又第三批判の本序に於いて叙述されしことと相照して種々のカント文獻ことにその體系について興味ある問題を導くと云へやう。——この事については次の節に於いて叙べられるであらう——。

第四章では約十四行(カツシラー版にて)を除く殆んど全章が捨てられてゐる、そしてこの章に於いては自然が第一批判に於いて對象の總概念であつて、悟性はそのアプリアリにすぎなかつたが、今こゝに一般的法則のみならず特殊的法則も注意さるべく、現象の總概念、又經驗一般も單なる集合ではなくして悟性の先驗的法則と或體系的關連を爲すと見るべきであることを叙べてゐる。この章の連絡によつてのみ、私達はなだらかに第五章

の反省的判斷力の概念に達することが出来るのであつて、もし私達がこの準備なしにベツク稿に於ける如く唐突に判斷力の概念に接したる場合、私達はそこに或種の昏迷を感ぜざるを得ないのみならず單なるかの十四行の判斷力の叙述によるならばこゝに於いても又、判斷力の概念が單なる意識現象の反省によつて導かれたにすぎないと誤解される危険性を多分にもつてゐると云へるであらう。

次に抄略されし第六、第七章はこのカントの草稿に於いて特殊的興味を引くところのものであり、しかも第三批判に入るに先つて重大なる説明的價値を擔ふところの *Technik* の概念が第一章と相俟つて、極めて丁寧に叙述されてゐる箇所である。彼は第一章に於いて理論的と實踐的の哲學

的二分野を分つに當つて、通俗的に *praktisch* の概念は、例へば *praktisch Geometrie* としての測地學に於ける如く、二次的なるもの、或は原理より導かるゝ推論的なるもの *Forgen* として取扱はれてゐると考へ、それでは眞の意味の實踐 *praktisch* との間に混同が起き易いとして、その推論的なる場合を *Technisch* として *Praktisch* と區別した。そこで彼は *Technik* の意味を解するに、理論的でも實踐的でもない判断、即藝術に於いてのみ可能なる根據を見出すところの評價力 *Beurteilung* をもつて自然の對象に應接する仕方であるとし、それは對象の事態について客觀的に規定せんとするのではなくして自然そのものが我々の認識能力に對する主觀的關係に於いて評價せられるの仕方である。こゝでは單に判断が *Technisch* で

あるのではなくして、判断力がそれ自身の法則の下に己自身を根據づけ、しかもそれによつて自然をも *Technisch* と稱するを得しめるものなのである、かくの如き *Technik* の概念はそこで客觀的规定を持たざるのみならず又 *doktorinales Philosophie* にも與らない、寧ろたゞ我々の認識能力の *Kritik* を導き出すのみである。この思想が再び第六第七章に於いて繰返して更に精密に分析されて行く。理性の客觀的原理への營みである現象の説明 *Erklärung* は即機械的 *Mechanisch* であるが、しかしその同じ對象に於ける評價 *Beurteilung* の法則は理性の主觀的原理への營みであり又それ自身への反省であるが故に技術的 *technisch* である。自然の因果律はその生産の形式が目的として見られたるときその巧み *Technik der Natur* として

て見ることが出来るのである。しからばその「自
然の技術」はいかにして私達に知覺し得るか。目
的の概念は決して經驗の構成的概念でもなく、又
對象の經驗的概念に屬する處の現象の規定でもな
い。何となればそれが範疇で有得ないからであ
る。只私達の判斷力はそれがそこにあたへられた
る客觀について、それを經驗概念の素材とするこ
となく、又思惟概念の内容とするのでもなく、只
單に與へられたる對象について内省 *bloße reflectieren* する場合、合目的性について *wahnehmen* することができるのである。

第七章に於いて更に注意さるべきことは彼はこ
ゝで凡ての經驗的概念に於いて認識能力の三つの
働きを區別する。即ち、直觀の多様の把握 *Auffa
ssung* (*apprehensio*)、二、一對象の概念内に於け

るこの多様の意識的綜合的統一 *Zusammenfassung*
(*apprehensio comprehensiva*)、三、この概念の相關的
對象の直觀に於ける叙説 *Darstellung* (*exhibitio*)、
の三者の中第一に於いて想像力、第二に於いて悟
性、第三に於いて判斷力が要求される。この第三
の場合の判斷力に於ける如く、それが經驗的概念
に關する限り、判斷力は規定的判斷力であるが、
しかしもし知覺への單なる内省が規定概念へのた
めに爲されたる反省でない場合、寧ろ概念的能
力としての悟性に代つて知覺を見渡す秘密なる規則
に關連する限りに於いては想像力と悟性の關係は
先に置かれたる如き段階的のものではなくして、
寧ろ判斷力一般の中に兩者共に肩を並べて、しか
も與へられたる知覺の傍に働けるすがたのまゝ立
たしめられ、比べられ又觀察せられるのである。

かゝる經驗的直觀に於ける與へられたる對象の形式に於いては想像力に於ける多様の把握と、悟性に於ける概念の叙述も一つとなつて融合して單なる反省の中に想像力も悟性も各がじしなる能力のまゝに總括せられて、對象は判斷に對して合目的々に知覺される。合目的性が主觀的であると云ふのはかゝる意味に於いてある。かるが故にそれらに對して對象についての規定概念を要求さるゝことも、又産み出さるゝこともなく、判斷も又認識判斷ではあり得ない。

この第六、七章に於ける *Technik* の概念より目的論に移る彼の考へ方がそれ自身カント文獻に於いて劃期的重要をもたないにしても第三批判ごとにその目的論に入るにあつて説明的價値の重大であることは疑へない、それについての叙述は

以前の凡ての稿にも又此後の何れの稿にも見るあたはざるが故に多少の注意の與へらることを要求できると思ふ。この稿の凡てがベツクによつて捨棄されしことはたとひそれがその一部の第三批判本序との重複を避けんとして爲されたにもせよ、失ひしものは得られしものよりも多大である事をまぬがれない。

第九章は本序の第九章との重複を避けるために、第十一章の最初の稿半頁及第十二章の全體はそれが第三批判の序文としてその本文の内容を説明したものであるためにこれをベツクは取らなかつたと見るべきであらう。

かうしたベツクの抄略の仕方の中にはそれがたとひ第三批判の本序との重複を避けるために爲されたのであつたと云へ、それによつて結果され

し論脈の破壊、論旨の轉換等——その中にカントの體系的思惟法方の餘りにも無視されたることもふくまるゝのであるが——の過誤を見出さざるを得ざることは、カントの完全なる理解を志す學徒に取つて少なからぬ不幸をもたらしたと云へるであらう。この態度にあきたらずしてカツシラー並にビュークがこの新に發見されたる前序をその全き姿をもつて彼が全集に編入れたことは寧ろ正當であり、而もカツシラーを導いたコーヘンの思惟の態度がこのカントの體系的思惟法方について穎利なる注意を怠らなかつたことによつて興味ある意味をそこに見出すを得るであらう。⁽¹³⁾

勿論カントの思惟の傾向が範疇の Einheit に向つて進めるか、或は Selbst Bewusstsein の Einheit に向つて進めるかについては私達は多くの疑問を

未だ持たなくてはならないし、又それは永久に論争の核心として残るであらうけれども、今私達の興味は寧ろこの二つの方向がカント自身にすら迷易き問題として残り、しかもそのエピソードとして打越へ難き二つの潮流にさへ導いたことにあると云へるであらう。私達はいかにカントを理解すべきかをたづねるよりも先に、まづいかにカントが在つたかを知らなければならない。そしてそのためにはこの二つの思惟の徵表を注意して瞻りながらカントの中に如何にそれが成長したかを見るが必要であつて、その解釋に先つてあはたゞしくもその二つの何れかの立場に立つてこれを見んとすることは避けらるべきである様に思はれる。この意味で私はベックの思惟法方とカツシラー並にビューク等の思惟法方の何れが正しいか

を云はうとするのではないにしても、もし何れかその権利を越へて行き過ぎたる場合はその何れかの過誤に注意をしなければならぬであらう。そしてこゝではベツクの立場にそれに似しものを見出して、細心の反省を自らに喚ぶものである。

—

私は前節に於いて極めて簡單ではあつたけれどもカントの前稿とベツク稿との比較をなしたのであるが、今こゝに更に前稿と本序との關係について見てみたいと思ふ。

前稿の第一章と本序の第一章の關係は同じ主題及論旨について前者の六頁(カッシー版)に互つて論ぜし事を後者が極めて明快に三頁に縮めて叙

述したのであつて、而して、簡約されしものゝ大部分は即 *Technik* の概念についての説明的部分である。第二章に於いては前序の第二章の最初の項及第三章の一部に於いて僅に問題と成つた美の思惟の領域又は根據への考察が本序の第二及第三章の全體の問題と成つたのである。前序に於いてはすでに藝術としての自然の表象は單に理念であつて、その學は決して *der doktrinalen Philosophie* には屬せずして *System der Kritik der reinen Vernunft* に屬することをのべてゐるが、その批判の組織領域についての判明なる區別を見出すことが出来ない。本序の第二章はこの意味で極めて重要な指命をもつてゐる。

カントの第三批判の思想に入るに先つてカントをそれに導いた二つの道があつたと云へるであら

う。一つは美及合目的性の評價に於ける體驗的與件、他は認識の *Boden* に於ける體系的組織の溝渠の充實のそれであるのであらう。そしてこの前者である *Zustand des Gemüts* を後者である *System* に結付けし最初の手が、りはこの前序に於ける *Technik* の概念であつたのである。この概念をカントはその本序に於いて顧ること稀れであつたことは、——たとひこの概念がその思惟の底に根を張つてゐたにしても——却つてその更りに認識の *Boden* について考察をより嚴密ならしめしこと、關連してカントの思惟の仕方の方向を注意する意味で興味が深い。彼は本序の第二章に於いて極めて明確なる認識領域の區分を未だ何れの他の文獻にも見るを得ざる敘述をもつて規定する。即それは認識の三つの場所 *Feld*, *Boden*, *Gebiet* の思想

である。その認識が可能であれ不可能であれ概念がその對象を持つ限りに於いて概念はその *Feld* をもつてゐる、とカントは云ふ。その *Feld* の一部分の中に於いて認識の可能なるものに限りそれは概念の *Boden* となる、更にこの *Boden* の一部分の中に於いてそれが法則を與へ得る限りに於いてそれは概念に對してその *Gebiet* と成る。そして、その各々の領域に隨つて各々の認識能力が分たれる。先づ私達の認識能力は二つの *Gebiet* をもつ、即之れは自然概念のそれと、自由概念のそれである。哲學も又それに隨つて理論的と實踐的とに分たれる。しかるに *Boden* に到つてはその上に *Gebiet* が説立され、法則が與へられるにもせよ、それが現象として取扱はれない限りに於いて只可能的經驗の對象の總概念にすぎない。それ

が悟性によつて法則付けらるゝに至つて始めてそれは理論的 *Gedert* と成り、理性によつて法則づけらるゝに至つて始めて實踐的 *Gedert* となる。そしてその二つの領域は永遠に一つと成ることの出來ない處の二つの領域であるが、しかもそれは超感性的なる *Feld* に於ける叡知の *Einheit* の根據の上に又結ばねなければならぬ二つの領域でもある。カントはその連續を完成するために中間者としての判斷力を導入する、そしてそれが法則を與へることができないまでも特殊の原理をもつて法則を求め、それ自身主觀的アプリアリのもとに自らを支へんとすることを許さうとする。⁽¹⁴⁾ この永遠なる追放者である詩の原理の住み得る唯一の領土はカントにあつては即この *Gedert* の底に横はる *Boden* の國であつたのである。

カント第三批判序文前稿について

私は兩序の第二章の比較にあつて、この兩序がカントの幾多の他の文獻に於て成されたる認識能力の領域的組織についてもつ文獻的位置を確めることで更に判然とその意味を見出すことが出来る様に思はれる、そしてその事は又前序の本序に對する關係に對する根柢的疑問を掘起すに最も近い道とも思へる。私はしばらく眼を他に轉じて起伏多き彼が思惟の脈絡を彼が過去に見渡したい。

一七七一年六月七日のヘルツへの手紙にすでに私達は彼が「感性和理性との限界について」と云ふ題目の下に趣味論、形而上學、道德學等について仕事を爲しつゝあることをすでにつげてゐることを見る、⁽¹⁵⁾ その翌年の二月十一日にはこの題目の下に感情趣味、評價力の原理が快適、美、善に對する作用とゝもに或程度まで満足な研究が遂げられ

この著の計畫を分つて左の如く、分類する⁽¹⁶⁾

I. Theoretische Teil.

1) Die Phenomenologie überhaupt.

2) Die Metaphisik, und zwar nach ihrer Nature u. Meth

oder II. Praktische Teil.

1) Aegem, Prinzipien der Gefuhls, des Geschmacks, u. de
rsmlichen Begieße.

2) Die erste Gründe der Sittlichkeit.

この二部をもつて純粹理性批判を構成するのであつてその第一部即形而上學の淵源、方法、及分類を含むものは來月中に出来ることを豫約したのである。——それは九年の遅延を見る運命に在つたのであるが——そして第二部即道德の純粹原理はその完成について爲されるべき計畫の下にあつたのである。翌年の手紙には

I. Kritik der reinen Vernunft (Transcendental Philosophie)

II. Metaphisik.

1) Met. d. Natur.

2) 〃, 〃, Sitten.

の前者を早く終へて、早く後者に移りたいことを告げてゐる⁽¹⁷⁾

七七年八月二十日に於いては彼の思想が種々なる哲學的問題に向つてこれまで斷片的に爲されたる攻究が除々に體系的に成つたこと、全體的に成つたことを告げてゐるしかしその完成について常に障害の石と成るものは即純粹理性批判である、そしてそれを除くために彼が仕事に急いでゐたことが知られる、⁽¹⁸⁾この事は即彼が理性批判の企圖の遂行を爲しつゝも、又體系的形而上學の組織にも努力して居りしかも、その凡ての目安がすでにつきながら、この批判の事業のみがその困難なる路を

辿つてゐたと見らるべきであらう。この事業は度々の遅延の爲に、一八八一年三月に彼の手から脱したのである、こゝで彼はこの學問自身の體系について最も確固たる形をそなへたる主張と爲り得たのである。⁽¹³⁾

彼はこの第一批判の展開に先つてまづ Kritik と Doctrin の間の判明なる區別を要求する。それが先天的に可能なるべき限に於いて、對象よりは寧ろ對象一般を認識する方法に關與する所の凡ての認識を彼は先驗的 transcendental と名づける。この如き概念の體系が即彼が所謂先驗哲學 Transcendental-philosophic. である。この先驗的哲學即「理性の體系に對する豫備學 Propädeutik」は悟性使用が成立するために絶對に必要な思惟規則即規準 Kanon を規定するの意圖をふくむ。すなはち、

悟性をそれが如何なる對象に向けられてあらうともその對象と無關係に取扱はんとするものである。Kritik とは即それである。かゝる論理學をカントは一般的悟性使用の論理學として、特殊の悟性使用の學と判明に區別せんとする。後者は或種の對象に對して正しく思惟する規則を規定せんことを意圖するものである。前者の規則が規準 Kanon であるに對して後者の規則は即機關 Organon である。カントの用ゆる意味に於ける Metaphisik 又狹義の意味に於ける Philosophie とは即後者の學であつて、Kritik に對立して Doctrin の學と云ふ⁽¹⁴⁾

この Kritik 即一般的悟性使用の論理學が分れて又二つと成る、純粹論理學 reine Logik と應用論理學 angewandte Logik が即それである。前者に

於いては悟性活動の従ふあらゆる經驗的制約、例へば感官の影響、構想力の關與、記憶の法則、習慣の力、性情など、従つて偏見の源泉のみならず一般に我々に認識を與へるもしくは與へると見做さるゝあらゆる原因は顧慮されないのである。何故と云ふに此等のものは悟性使用の或事情の下に於いてのみ、悟性と關係しそしてその事情を知るために經驗が必要とせられるから。すなはち一般の純粹論理學は先天的原理のみを取扱ひ、悟性と理性の使用の形式的なるもののみ關してその規準 *Kanon* を規定するものである。反之應用論理學は主觀的經驗的制約のもと行はれる悟性使用の規則を問題とするが故に此學は對象の區別と無關係に悟性使用を問題とする限りに於いて一般的であるとは云へ本來經驗的特殊原理を含んでゐる。

故にそれは悟性一般の *Kritik* に於ける *Kanon* ではなく又特殊科學の *Doktrin* としての *Organon* もなく單に *gemein Verstand* の洗滌劑 *Kathartikon* にすぎないのである。應用心理學と云へば一般的には普通純粹論理學の練習的作用 *gewisse Exerzizen* と云ふ如き意味をもつてゐるけれどもこゝに於いては悟性の *in concreto* なる使用の規定を意味し、我々が悟性使用にあつてそれを妨げ或は促進する處の經驗的にのみ知得る主觀の偶有性の研究である。例へば注意並にその障害又は結果、誤謬の起源、疑惑、躊躇、確信の状態等をそれは取扱ふ。純粹論理學の此學への關係はあたかも自由意志の必然的道德法則一般のみをふくむ純粹論理學の、この法則を感情、性情、情慾の障礙のもとに考察する處の本來の道德論に對する關係と同

様である後者は決して論證されたる眞の學とは成得ない、何故ならそれは應用論理學に於けると同様に經驗的並に心理的原理を要求するからである⁽²¹⁾

こゝで私達はカントに於ける學問の二つの領域即 Kritik-Doktrin との二大別を見出すこゝにも又その前者 Kritik の中には純粹論理學の二つの領域即思惟規則一般をふくむもの、及道德法則一般をふくむものを持つて居りしかもその各々がその應用論理學として各々二つの in concreto なる學を構成し、純粹論理學の規則は規準 Kanon なるに對して應用論理學のそれは常識の洗滌劑 Katharikon にすぎない事を成るのである。第一批判に於いてのカントの趣味批評の學に對する態度は明確に否定的であつて、この思惟と道德の二つの領

域の外には純粹論理學としては勿論又應用論理學としてすらその成立を拒否されてゐたのである。彼にあつては美の領解を理性原理の中に導きその規則を學にまで高めんとする如きことはかのバウムガルテンによつて試みられたる誤れる努力を出でることではできない、何故ならば彼は云ふ Denn gedachte Regeln oder Kriterien sind ihren (vornehmsten) Quellen nach bloss empirisch und können also niemals zu (bestimmen) Gesetzen a priori dienen, wornach sich unser Geschmacksurteil richten müsste, vielmehr macht das letztere den eigentlichen Probestein der Richtigkeit der ersteren aus……(括弧内は第二版に於ける追加)

更にそれに續いた敘述に見るならば彼に於いて Aesthetik の語は第一版に於いては單に感性の先天

的原理の學に於いてのみ保留され、第二版に於いては——多少の讓歩をもつて——その先驗的の意味に於けるそれと、他に心理的意味のそれを認めることに止まり批判としての位置は如何なる意味に於いても持ち得なかつたのである。⁽²²⁾而もこの第二版が出て後僅かに二ヶ月シュツツへの手紙に於いては實踐理性の批判の仕事を終りヘルデルのイデインの批評の傍ら趣味の批判の根據について研究を進めんことを漏してゐる。⁽²³⁾更にそれに後るゝこと六ヶ月、ラインホルトに與へられたる手紙に至つて初めて趣味の批判が可能であるとの考へ方が彼に啓示されたのである。⁽²⁴⁾そしてこの Kritik に於ける應用論理學の理論的部分はカントに於いて何の謝りもなく消え失せて、その實的踐部分は後の „Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre.“

の中にそれに相當する敘述を見るのみで應用論理學としての意圖をもつてされたるものはその何れの稿にも見る事ができない⁽²⁵⁾そして皮肉にも理論的と實踐的の兩概念の應用的技術的部門の分析より Technik の概念が導かれて、それが遂に緊密なる關係を趣味の批判の可能に結付くに至つたのである。それが實にこの前稿即一七九〇年（一月—三月）に於いてあつたのである。⁽²⁶⁾

これより先一八八四年九月にその稿をその手より放したと云はるゝ „Grundlegung zur Metaphysik der Sitten“⁽²⁷⁾ に於いても彼は學の領域の分類について大體第一批判に於けると同じ敘述を試みてゐる、只異るのはそこでは純粹論理學には最早經驗的部分が有得ずして寧ろ形而上學 (Naturlehre, Sittenlehre) には先天的原理により説明する領域

があると同時に又經驗的部分が有得る。例へば道徳學の前者を Moral とし、後者を Praktische Anthropologie とするが如くである。かくしてこゝでは第一批判で Kritik として應用的即經驗的部分が Doktrin としての經驗的部分として轉換されてゐる、そして趣味の批判の可能がその念頭に浮ばなかつたことは彼がそれについて隻語だも觸れず又觸れたとしても彼がその或箇所を用ひし比喩に於ける如く藝術 Kunst を單に勞少しくて功多からしめんとする一種の技術として工業乃至商業と同様に單に職業的地位に置きしことにも見るを得るであらう。⁽³⁵⁾

この「道徳形而上學の基礎」の思想が時期的に第一批判の第一版と第二版の間に挟まれる事はその思想が第一版と異なりながら而も第二版がそれに

ついて何の補正追加をも爲さなかつた事と相照して私は解し難き謎に面する。單にそれを彼が不注意なる暇過に托しないとするれば私はほごこすべき何の説明をも持たない。

ともあれ、私達の今必要とする批判の體系に關しては第一批判第一版一八八一年より第二版一八八七年四月二十三日に至るまでは内的の動搖が可成激しかつたらしきにもかゝはらず表面には僅かの讓歩をもつて持續されてゐる、そしてかの六月二十五日のシュツツへの手紙に於いて見る如くすでに彼は趣味批判の根據について研究の手を染め同年十二月二十八日のラインホルトに與へられたる手紙でそれが始めて可能と成つたのを知るのである。⁽³⁶⁾

一、認識能力、理論哲學……………理性批判

二、不快不悦の感情、目的論……趣味批判

三、慾求能力、實踐哲學……實踐理性批判

の三つの部分が批判の體係と成來り、人間心情の組織的觀察がそこで初めて可能と成り、而も感情は批判として可能なるのみならず哲學としても存在し、趣味批判と目的論の關係はあたかも理性批判が自然哲學に關する關係と同様であつたのである。この考へ方が更に一七八九年五月十二日ラインホルトへの手紙では更に發展して趣味批判は判斷力の批判の一部分と成つて第三批判への大體の道筋が確立さるゝに至つた。⁽³⁰⁾ カントのこの序文前稿は一七九〇年一—三月の間に成つたものと見なされこゝで始めて美及目的論についての學としての根據即批判としての可能性についての確固たる考へ方が定立されるに至つたのである。願れ

ばすでに一七七一年六月批判の事業の中に胎まれた趣味論、形而上學、道德學が決して垣かではなかつたところの思惟の道を辿つてついにこゝに落ちつくに至つたその長い二十年の過程は決して一朝の觀察で左右され難き重きものでなくてはならないであらう。私は今それを表示することによって彼に於いて成長し來れる理性の内的組織の道程を觀る便宜を得たいと思ふ。

▲一七七一一年、六月、(ヘルツへの手紙)「感性と理性との限界」
趣味論
形而上學
道德學

一七七二年、二月、(ヘルツへの手紙)「感性と理性との限界」
(一)理論的部分「現象學一般」
(二)實踐的部分「趣味……原理」
「感性と理性との限界」(二)實踐的部分「道德の根據」

▲一七七三年、(ヘルツへの手紙)「純粹理性批判(先驗哲學)」
純粹理性批判(先驗哲學)
形而上學
自然
道德

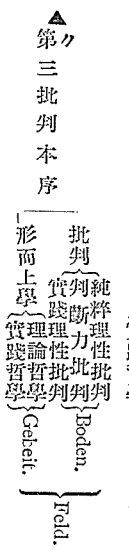
一七八一年三月「純粹理性批判(論理學)」
批判(論理學)
純粹理性……應用論理學
實踐理性……道德論
Kantianikon
「純粹理性批判」
形而上學
自然
道德
Doktrin.
Ogvanon.

- ▲一七八四年九月 「批判(論理學)」「道徳形而上學の基礎」 「形而上學」 [自然……物理學] 經驗的 [道徳……人性論]
- ▲一七八七年四月 第一批判第二版出版

- ▲一七八七年十二月 (ライオンホルト) 批判 認識能力 (純粹理性批判) 不快の感情 (趣味批判) 慾求能力 (實踐理性批判)
- ▲(ライオンホルト (の手紙)) 形而上學 目的論 實踐哲學

- ▲一七八九年五月 (ラインホルトへの手紙) 判斷力批判(趣味批判)

- ▲一七九〇年(一月-三月) 純粹理性批判 判斷力批判 不快の感情 實踐理性批判 目的論 [Telctisch,] Technisch.
- ▲第三批判序文前稿 形而上學 實踐哲學 [Prattisch,]



彼に於いて美或は崇高の感情が體驗的處與とし

て問題と成りしことはすでに一七六四年の „Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen“ に於いて興味多き敘述を成つて現はれてゐる⁽³²⁾。そしてそれが學として遂に可能と成りし一七

カント第三批判序文前稿について

九〇年までの二十六年の時は即體系的組織の中にその位置を求め續けられた、——そしてそれは決して安易ではなかつた處の——長い過程であつたのである。私達はこの表に於いて見るごとくこの間に趣味判斷は幾度も批判として或は形而上學として取捨されながらついにこの序文前稿に於いて Technik の概念を媒介として判斷力批判に結び、形而上學と絶縁せし事、そしてそれがついにカントに於いて最初の決定的立場であつたことは彼が批判の體系の最後の又最初の確立と成つた意味に於いてその位置を浮彫づけるものである。

そしてこの Technik の概念がその本序に於いて顧らるゝことを稀であつて、それに換ふるに認識の三つの場所 Feld, Boden, Gebiet. の思想をもつてせしことは、彼の體系的組織の方向の更に深き徹

底としてしかもそれがベツクの抄略に於ける場合とは全く反對である意味で興味深く觀察できるともに又彼の長い過去に連結してこの序文前稿より本序への推移について物語る或ものをもつ様には思はれる。この意味で兩序の第二第三章が著しく

異つたことはその兩序の背後に遙にも擴るカントの思惟の脈絡を通じて始めて領解できる處の説明としての序文より體系縮圖としての序文への推移を意味したのではないかと云ふ疑問の提出をうながすものがある。この疑ひの眼をもつて見るならばこの第三批判の序文として餘りに長きにすぎた前稿を捨て、更めて本序を草するにあつて或はカントはその説明的部分の凡てを除却して、體系構成の要點をこゝに叙述せんと企てしかもレーマがすでに氣付きし如く、その展開をデアアレク

テイツシュなる方法に求めたのではないかと思はるゝ點をその九箇の章の構造の中に見出すを得る様である。しかし、その疑ひは只ごもれる回答をのみしか得ることができないのではあるけれども。

前序に於ける第四章第五章にて冗長にまで精しく説明されたる判斷力並に反省的反斷力の叙述は本序では第四章の中に極めて明快に抄略されてゐる。そして本序の第五章に於いては判斷力と合目的性との關係について前稿に見ない精密なる検討が行はれてゐる。第六章第七章は先にも簡單に紹介せし如く前稿に於いては *Technik* 概念と合目的性との關係が緊密に取扱はれた所であるが本序ではその *Technik* の概念との關係を打切つて、第六章に於いて新に快不快の概念と自然の合目的

性との關係を論じ、前稿の第七章の中の叙述の一部を用ひながら自らの第七章に於いて前稿の第八章の内容をその中に盛つてゐる。前稿の第九章の内容は抄略され且多少の變更をもつて本序の第八章に叙述されてゐる。前稿第十章、第十二章は、本序では抄略されてゐると見るべきであらう、又それは前稿中では最も多數の前章との重複を見るところでもあり、殊に第十章は表題それ自身も示すが如く *technischen Urteilskraft* についての討究でもあるが故にカントがそれを切棄てし意味も了解できるであらう。本序の最後の章を爲す第九章は前稿の第十一章の抄録と見るべきであると思ふ。この變更に當つて注意するべきは前稿に於ける非難をまぬがれる事のできない冗長と晦澁 (*langtümiger und unweiger*) より逃れる事及 *Tec*

カント第三批序文前稿について

Einheit の概念に對する忌避、それに更ふるに體系的組織化——後期カントの傾向と呼べる、それ——への僅かではあるけれども明かに觀取せざるを得ざる徴候を見るが様である。そして若しレーマンの所謂本序のデアアレクテイシユなる展開法即その九箇の章の前三者は悟性及理性の結合者としての判断力の確立を意圖し、次の三者が判断力自らの先天性の確立並に自然の合目的性及快適感情への結合を、更に次の三者が美的、合目的性の展開とともに叡知の統一への還歸を意圖せることがカントに意識的に爲されたのであつたとするならば前序の十二箇の章が本序に於いて九箇の章に抄録されし事は明かなる——餘りにも明らかなる——理由を見出すであらう、しかし私はこの事について又の機會に於いて一々の論脈及語句の比較

の後に見定めたいと思ふ。

私は只こゝにこの前序のもつ意味をベツク稿及本序と比較しながら進むことでカント文獻に於ける位置に對して極めて簡單なる見取を爲すことが出来たと思ふ。その成立の歴史的關係及内容についての精しき批判はカッシーラー、ブノーク、レーマン⁽⁵⁾によつて爲されたる親切なる敘述に譲りたゞ思ふ。(訳)

註

- (1) Kant, Dissertationen Schriften zur Logik u. Met. (Kielmann), s. 147.
- (2) Kant, Werk (Ernst Cassirer) X, s. 98—99.
- (3) 〃 Y, s. 589—590.
- (4) Dilthey, Schriften, IV, Die Jugendgeschichte Hegels, s. 568.
- (5) Kant, Werk. (H.C.) V, s. 177—231. Kant, E. E. i, d. K. d. U. (Phil. Dil.) G. Lehmann.
- (6) Cohen, Logik, s. 314, s. 346, s. 418, s. 463. Ethik, s. 13.
- (7) Kuno Fischer, G. d. n. Philosophie, s. 89—102.
- (8) Dilthey, ibd., s. 310—322.
- (9) Kuno Fischer, ibd., s. 96. (S. Beck, Einzig mögliche Standpunkt uff. Abschn II § 1, s. 120—131.) (1796)
- (10) Kant, Werk. (E.C.) X, s. 144.
- (11) ibd., bd. V, s. 583.
- (12) ibd., s. 584.
- (13) Cohen, Logik, s. 8—9, s. 325—335, s. 601. Kant's Begr. d. A. s. 340—341.
- (14) Kant, Werk. (E.C.) V, s. 244.
- (15) ibd., bd. IX, s. 97.
- (16) ibd., s. 102—106.
- (17) ibd., s. 116.
- (18) ibd., s. 160—161.
- (19) ibd., bd. III, s. 80—82.
- (20) ibd., s. 208—209. Aesthetik s. 23—25.
- (21) Krants Begründung d. Aesth. s. 337—341, s. 343.
- (22) 彼は一般にロマンティック學派に對して好意を示さなかつた殊にフイヒテに對してそうである。それは又カッシーラーがプロテスタントの宗派的黨派心にまじり結付いてゐるやうである

- (20) *ibid.* s. 49.
- (21) *ibid.* s. 82.
- (22) *ibid.* s. 56--57.
- (23) *ibid.* *bd.* IX s. 328--329.
- (24) *ibid.* s. 245.
- (25) *ibid.* *bd.* VII, s. 188 ff.
- (26) *ibid.* *bd.* V, s. 182--183.
- (27) *ibid.* *bd.* III, s. 243 ff.
- (28) *ibid.* s. 244.
- (29) *ibid.* *bd.* IX, s. 345.
- (30) *ibid.* s. 404.
- (31) *ibid.* *bd.* V, s. 586.
- (32) *ibid.* *bd.* II, s. 243--300.
- (33) Kant, *Erste Einleitung in die Kr. d. U.* (*Phil. Bib.*) II, b. Gerhard Lehman, s. VII.
- (34) *ibid.* *bd.* V, s. 581--59 d. *Bink*) *ibid.* XI, s. 314--327. (Cassirer)
- (35) *ibid.* Lehman, s. 64.

寄贈雜誌書籍

ジム社會學的文化論	五岩十波	信	店
ムジエー心理學	今岩田波	惠	店
希臘語文典	岩中波	秀央	店
得能博士哲學論文集 還曆紀念	岩波	書	店
集約論理學	甲子鳥	社	房
王陽明の哲學	甲子尾	社	房
眞理の偶像	山崎	社	房
新大品般若經	三井	社	房
論理學	文原	堂	房
人間の高昇	松島萬次	一	房
哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、觀想、內外教育評論、學校教育、教育時論、願慧、信濃教育、東亞之光、教育學術會、都市教育、生理學研究、國民史語、教育論叢、佛教研究、講座	寺田	堂	房